

天声人語

稲刈りを終えた田んぼが並ぶ山形県山辺町を訪ねた。ロシアがウクライナへの「報復」を激化させるなかで、法と秩序を信じた先人の原点に触れるために、

▼外交官や国際法学者として、戦前の欧州で活躍した安達峰一郎。今も残る茅葺き屋根の生家に、直筆の短歌が展示されていた。〈故里の春を偲びてなき親の墓を訪ひたく心せかるる〉。案内してくれた郷土史研究会の佐藤継雄さん(88)は「望郷の思いだ。最後の帰国で墓参りの時間もなかったから」と話す▼多忙の理由は、戦前にオランダで設置された常設国際司法裁判所の判事選挙が控えていたためだ。外交官として第1次世界大戦中の欧州を見た安達は、戦争はダメだ、裁判で解決するべきだと信じたという。判事選でトップ当選し、アジア系初の所長に就任した▼初会議で「理念は永遠で、制度は残る。でも人間は変わる」と語り、揺るがぬ強さを求めた。だが、間もなく満州事変が勃発し、日本は国際連盟脱退を通告。安達は体調を崩し、オランダで客死した。「祖国と信念の板挟みになり、無念だったろう」と佐藤さん▼第2次大戦で失敗を重ねた世界は、新たな枠組みの国際連合と裁判所をつくった。それでも戦争はなくなるらない。ウクライナ危機で国連安保理は機能不全に陥り、国際司法裁判所が軍事作戦の即時停止を命じてもロシアは従わない▼法も秩序も無視する指導者に、平和を求める道はあるのか。「探し続けよ」という声が蔵王の山並みから聞こえた気がした。

2022・10・12

購読・配達 お問い合わせ=0120-33-0843(7~21時)

ASA検索

検索

紙面へのご意見、過去記事の掲載確認=0570-05-7616(平日10~18時、土曜9~17時)